

京都正教女学校の設立

正教時報

(昭和三十五年十月十日第八五一号発行)

往時断片

(シメオン三井道郎遺稿)より

壮麗な聖堂が折角出来たとしても、定まった詠隊がなくては正教奉神礼の美を發揮することが出来ない、また、関西地方正教信徒の女子を正教の教旨で涵養する必要も感じられたので、東京女子神学校教師中より高橋(安彦)五子姉を選抜して主任教師とし、これに八木理子姉(後の高久神父夫人)を助教師として随行させ明治三十四年十二月下旬京都に赴任せしめた。

その翌年三十五年一月より京都正教女学校を開校した。募集に応じ入学した女生徒は約二十名であった。同女学校は年と共に益々発展し、関西における正教唯一の女学校として大いに望を囑せられるに至った。然るに女学校設立より僅か十五、六年した経たないに欧州大戦の影響を受け、本会よりの校費の仕送り杜絶えた結果、閉校のやむを得ざるに到ったことはかえすがえすも残念なことである。

「京都正教女学校」については当時の卒業生ナデジユダ沢部つた姉から学校生活の追想記などをご寄稿いただいたので京都教会百年史中でも最大の思い出であり、次の百年への第一歩に再現希望の夢として掲げさせていただきます。

京都正教女学校

ナデジユダ 沢部 つ た

京都正教会の日誌に依ると京都府から女学校設立認可は、明治三十五年三月三日とある。この学校は日本ハリストス正教会に奉事する司祭、輔祭、伝教師等物質的に報いられることの少い教役者の子女の教育機関として、ニコライ主教の御配慮によって設立された、女子の(五ヶ年制の)学校である。

- 一、信仰の教育 聖書、旧約聖書、教理教会史等
- 二、学業(一般高等女学校の学科目 外国語はロシア語、其他茶の湯、編物等)

三、信者の子女としての日常生活の指導

当初募集の時は通学生も少しあったよりであるが其後は全部寄宿生のみとなった。

教役者以外の信者の子女も少数在学を許された。其場

合費用は父兄負担であった。

若い先生方、炊事婦二人も全部信者で起居を共にした。

教師の方々

三井神父様 御転任後は 目時神父様

加納輔祭様 御転任後は 吉村伝教者

福音書の御講義、教理、旧約聖書、教会史、ロシア語等を担当して下さった

安彦先生 舎監

聖歌、国語、漢文、一般のコーラス、器楽指導（オルガン）

其他舎監として日常生活の指導

其他の若先生 八木先生御退職後

平山先生（旧矢部）蓮池先生、三田村先生、馬場先生、日比先生

国語、算数、体操、音楽、裁縫、ロシア語等担任せられた。何れも信仰篤い先生方で、安彦先生に協力せられ生徒の生活指導をせられた。全部寄宿舎で生徒と共に起居せられた。現在東京に平山先生が御健在（九十四才）他の先生方は全部御永眠なされた。

外部からの通勤の先生

幾何、代数、地理、歴史、絵画、習字、物理、化

学、等皆大学院の方や教授、師範学校の教諭、美術

学校の教授等。殊に物理、化学等の原先生は、博士

号三つも持たれたプロテスタントの牧師であった。

現在同窓生の小川田鶴師（眼科医）の恩師である。

其他、作法・茶の湯の先生として村上源蔵先生（京都教会の村上兄の祖父様）等

安彦先生は私達に外部から御来校下さる先生方は皆立派な博学の方である。その先生方に教えて頂くのは幸せである。と申された。

生徒の人数も少いのでよく行届いていたことと思う。

蓮池先生は、ロシア語、体操其他

その体操の時間に、徒手体操、又ダンス等習っていた。カドリール等、練習しているとその頃、東隣に商業学校があった。その生徒が塀に登って、坊主頭を並べて、のぞいている。蓮池先生はブリブリして「又のぞいているわ、いやになっちゃう。」「もうやめましよう」と切上げになることがあった。私達は、おとなしかった。

女学校の寄宿舎

寄宿舎の春は、大変美しい、中庭に桜の木と、かなり大きな連翹の木があって、同時に咲いた。入学した時は驚いたほど、きれいであったのを覚えている。

聖堂の北側に運動場があって、板塀の中に寄宿舎や教室、食堂、湯殿、其他、先生方のお部屋等。今も聖堂の門の左側にその頃の教室の建物が残っていて、なつかしい。今は他人の住宅である。

寄宿舎の一日

これは明治末から大正の始め頃

朝六時起床 寝具の片付、洗面、整髪、掃除

七時 — 広間に集って御祈禱、その日の当番は前に出て、代表で祈禱本を読む。祈禱後「おはようございます」の挨拶。その時は、きっちり坐して、手をつけて正しいお辞儀をする。この躰は厳格である

続いて — 食堂に行き一同食事 二人の炊事婦を助けて、食堂当番は二人、お運びや、お給仕等、皆が食事がすんでから炊事婦さんと一緒に食事をする。この当番は一週間交替である。

八時 — 授業始まる。

午前中の授業は、神父さんや輔祭さん他、内部の先生方

〇時 — 昼食

午後一時 午後は大体、外部から御来校の先生の授業である。三時に終る。

三時 — 五時まで 入浴週二回

洗濯、衣服の繕い、其他。

入浴の時は。井戸水を一人宛釣瓶に二十杯汲上げて木製のタンクに入れる。その頃は、まだ水道は無かった。

洗濯は週二回、定められた日にする。勿論洗濯機等はない。盥に洗濯板でゴシゴシの洗濯である。

上級生に教えられて、新入の十二才も同様である。午後五時 夕食。食事の献立は、先生方グループと各

クラス毎に、一週間分相談して表にして先生に出していた。

五時半 — 六時 自由時間 運動、散歩等（外出は出

来ない）

六時 — 九時 自習 各室正しく机を並べて、声を

出さずに静粛に予習、復習をする。

九時 — 机を片付けて、寝床の用意。

広間に集って、夕の祈禱。「おやすみなさいませ」の挨拶。

九時半 — 消燈。試験と謂ども、消燈である。

この時代は、今から六十年余以前である。今から思えば随分スバルタ式であった。過保護の現代から顧みれば

殿しい様であった。私の両親はこれを喜んだ。

教会の行事に参加

毎土曜日の夕、日曜日の朝、其他教会の祭日、齋及受難週間等の御祈禱には、先生、生徒、全員参拝する。

御祈禱の始まる時、門番の加美長さんが七ツの鐘のハーモニを美しく鳴らされる。私たちはこの音を誇に思っていた。

鐘と共に、生徒一同聖堂に行く、堂内の右側が聖歌隊の並ぶところで、各パートの場所に着く。

一年生又は二年生が順に、堂役を務める。誦経は、上級生が、これも順に務める。聖体礼儀も厳かに、聖歌もうまく歌えた時等先生の御機嫌も良いし、我々も、さすがしく、敬虔な気持になって祈るのである。やがて御祈禱も終り、又始めのように鐘が鳴って、我々も信者の方々も喜びに包まれて聖堂を辞す。当時同志社の学生等大勢参拝されて、時の吉村伝教者さんと討論等しておられて賑やかで、若さがいっぱいであった。

日曜日の午後

日曜日の午後は楽しい半日である。

先ず、一週一度のおやつを買う。一人宛金二銭也。当番

は各自に希望を聞いて、その希望は大体お芋であった。おせんべいも、あった。二人で当番が買に行行ってそれを分けて、のんびりと、頂きながら、ベチャベチャと。

それから、散歩の外出である。外出は、クラス毎に、行き先を先生に申出て許可してもらって行くことになる。

お金は誰も持たない、あまり遠出は出来ない。始めのうちは、御所へよく散歩に出たが、だんだん遠方へ行きたくなる。私たちのクラスは、南禅寺のインクラインのレングスの下（一寸エキゾチックなところ）又は下鴨の糺の森の鬱蒼とした流れのあるところ、その頃は、ゴミもなく、豊に水が流れていた。私たちは好んで此処へ来た。その美しさは、もうなくなった。

帰りは電車賃を持っていないから遠方へは行かれない。

しかし、こんなこともあった。

或る時クラス四人でインクラインに行って逢坂山を越えんと大津に行けると教わったので、次の日曜日、早速行って見たくて、行先を云えば止められるので、一寸そこから散歩してくるような、顔をして出かけた。案外遠くて、大津にたどりついた時は生憎雨が降り出し、電車に乗るにも、お金は持たないし、途方にくれて、旅館の軒先まで雨宿りしていると、その女中さんが、番傘二本出してくれて、これを、さしてお帰りと云ってくれた。

でも、私達は遠方で、直ぐ返しに来られないからと遠慮したら、何時でもよいからとの事で、それを借りて、二人宛寄り添って、トボトボと京の町まで帰り漸く聖堂の門にたどり着いたら、帰りの遅いのを案じて、三田村先生、馬場先生が立って居られ、すっかり恐縮、安彦先生に謝りに行くやら、お小言頂戴するやら、とんだ失敗で次の日曜日、其親切な旅館に傘を返しがてら、先生達生徒皆で、三井寺へ遠足した時、私は風邪をひいて留守番でした。

(この稿、小川田鶴姉寄稿より)

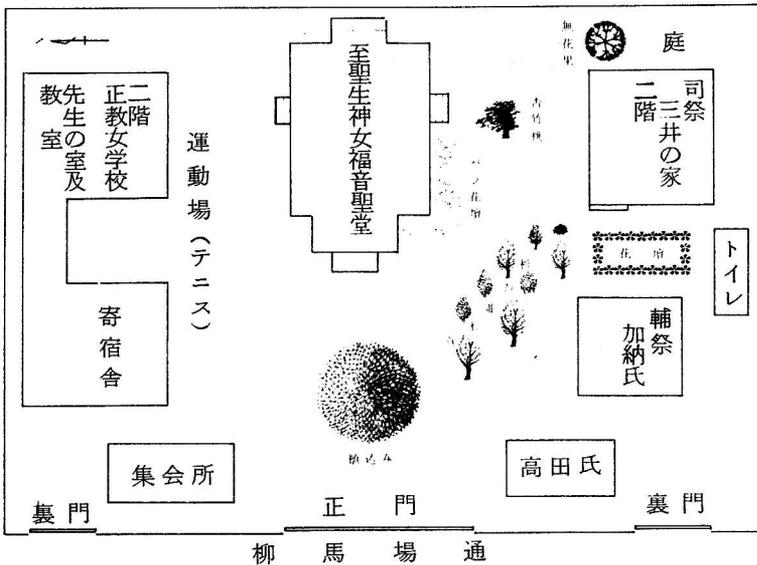
春又は秋、遠足があつて、先生、生徒一同、往復徒歩で比叡山へ、行きは白川口から、帰りはキララ坂の急坂から下山。その時は目時神父様も行かれた。

又、八瀬、大原など、乗物一切使わないで往復、歩いて、あの秋の空、みのりの畔道に彼岸花を愛で、大原御幸の悲劇の寂光院等、忘れられない。翌朝は、脚が痛んで困ったこと等あつた。

卒業前の秋に、矢部先生引率で吉野へ行つた、これも秋だった。宿坊で宿泊したその夜の、名月の美しさ、思い出は尽きない。

降誕祭や復活祭の祈禱後は、露国義勇艦隊支店長のフエオドロフさんからロシヤのお菓子のプレゼントがあつて、皆楽しみにしていた。神父さんのお宅へ、お招き頂

いたり、数々の思い出がある。学年の終りには、お別れを悲しんで泣いて卒業の歌もとぎれたりしたものであつた。



昔の教会境内(河本久代姉のお便りから)

京都ハリストス正教会
開教100周年記念誌

— 1978 —

発行者 宗教法人・京都ハリストス正教会

発行所 京都ハリストス正教会

〒604 京都市中京区柳馬場通二条上ル
六丁目283

電話 075-231-2453

発行日 昭和53年10月10日

印刷所 けんと商会

〒602 京都市上京区寺町通今出川上ル
三丁目十念寺前町

電話 075-211-1531